ことぶき新報

第 309 号 2019 年　3 月 10 日発行
出雲市塩冶有原町 1-50
社会福祉法人ことぶき福祉会『ことぶき園』
　発行責任者：山根広美
Tel　：（0853）31 - 9900
Fax：（0853）31 - 9901

先日、広島県にある特別養護老人ホームの清鈴園へ研修として訪問する機会をいただきました。清鈴園は、キリスト教の牧師さんたちが中心となって作られた施設ですが、その成り立ちは戦争や平和と深く関係しています。その牧師さんたちはかつて戦争に協力したという事実があり、それに対して責任を取るべきではないか、責任を果たすためにはどうすればいいのかということで、一九六七年「戦争責任告白」がなされました。そして、戦争責任告白への具体的な裏付けのために、被爆した人たちが入れる老人ホームとして一九七一年に創設されました。

園長である猪股誠司氏より貴重な話をたくさん伺うことが出来ましたが、その中で印象に残っている一つが、清鈴園の創設当初より行っている被爆体験の継承事業についてです。入所しているお年寄りから子供たちへ被爆体験を語り継ぐ「八・六集会」といったものがあるそうですが、私が小学生の頃、平和学習で同じように語り部さんより話を聞いたことが思い出されました。勿論、当時は当時なりに感じることがあったはずですが、大人になった今改めて学ぶ必要があるのではと思いました。これから戦争を知らない世代ばかりになっていく中で、戦争により多くの命が犠牲にされてきた事実、また平和であることの尊さを伝えていくことは、大きな課題であると思います。清鈴園は成り立ちこそ戦争への責任を取るといったものでしたが、私が実際その場で見聞きし、強く感じたのは、この清鈴園という存在そのものが戦争や平和について後世に伝える役割を担っている、ということでした。「いまの老人理解をするためには、戦争の歴史に触れずにはおれない」という猪股氏の言葉に対し、高齢者福祉に携わる者としても残された世代としても、戦争・平和について考える、歴史を知るということを怠ってはならないと感じました。

二つに、福祉とは何たるかです。地域福祉の方法について、「課題をみんなのものにする」「流行として事業を始めず、住民の声を聴き、関係者に投げかけていくこと」と述べられました。福祉は本来、地域の実状に即し柔軟に対応できるものであるべきです。市場原理に乗っ取った今の介護保険制度に対して、疑問を持つ、批判の声をあげるなど、福祉が本来のあるべき姿となるよう現場から発信する努力が必要であると思いました。また、現場での学びとして、礼儀や利用者本位の実践がなされているか、お年寄りはやむを得ず世話を受けているのであってそういった理解のもとにケアがなされているかなど問われ、今一度自分のケアを振り返る機会にもなりました。

猪股氏は「歴史のことを知ると過去から勇気づけられる」という言葉を書籍「誰もが幸せな高齢社会を求めて」の中で残されています。以前はお年寄りに対しては安静介護が当然とされていたり、地域の中では働く人が偏見や理解の不足により肩身の狭い思いをしていた時代があったとのことでした。今でこそ当たり前に言われるリハビリや地域福祉ですが、そういった時代に奮闘してきた方々がいて今があることを知ることが出来ました。日々の学びを大切にし、目の前の課題にどう取り組むか考える努力を続けていきたいと思います。

白山　マイカ

ある日の夕食後の事です。
ＭさんとＳさんがコタツにあたりながら、何やら楽しそうに話をしておられました。あまりにいい表情で話をしておられたため、私は少し離れた所から、聞き耳をたててみることとしました。すると「あんたは足も達者だし、手も器用だし、明るくて元気だし、一緒にいると元気になれるわ」「私は元気だけが取り柄だよ。おばあちゃんにわけてあげーよ」など話をされ「だんだん　だんだん」と抱き合っておられました。
そんなやりとりを聞いていた私もなんだかほっこりと心が温まるような、そんな瞬間でした。
お互いを認め合い、励まし、共同生活の良いところが垣間見えた場面でした。

暖かい春の陽気に誘われ外に出かけることも増え、いきいきと過ごされている皆さんです。桜のつぼみも日に日に大きくなってきており、「桜が咲いたら弁当持って花見しないとね。」と、今から待ち遠しい様子です。今までは寒い日も多く中々外へ出掛ける機会を作ることができませんでしたが、これからは外出する機会を多く設け、新緑の木々であったり、桜をはじめ様々な花を見たり、穏やかな日差しを身体いっぱいに浴びたりと、【春ならでは】を一緒に感じていきたいと思います。

皆さんで昼食作り。この日は焼きそばです。

かねてより食べたいと要望の多かったお寿司を食べに行きました。